説教20220508民数記27：12-23　ヨハネ10：22-30「神殿奉献記念祭」

神殿奉献記念祭と言うお祭りは、当時のユダヤ人が盛大にお祝いしたお祭りですが、キリスト教のお祭りとしては、全く継承されていませんので、御存じでない方も多いかと思います。逆に、キリスト教に継承されたお祭りである、過ぎ越し祭や刈り入れの祭りは、イースターやペンテコステに継承されており、キリスト者にもなじみの深いお祭りであります。

この神殿奉献記念祭がキリスト教に継承されなかったのは、それが世の終わりまでお祝いし続けることではなかったからですが、時のユダヤ人たちは、このお祭りを熱狂的に喜びお祝いしたようです。その様子が旧約聖書続編であるマカバイ記一4章59節からに記されています。「ユダとその兄弟たち、およびイスラエルの全会衆はこの祭壇奉献の日を、以後毎年同じ時期、キスレウの月の二十五日から八日間、喜びと楽しみをもって祝うことにした。また時を同じくして、シオンの山の周囲に高い城壁とな塔を築いて、これを固めた。それはかつてのように異邦人たちがやって来て、シオンの山を踏みにじることのないようにするためであった。」

つまりこのお祭りが始まったきっかけとなったのが、この祭壇奉献という出来事でした。この時、イスラエルは隣国シリアの支配を受け、神殿の祭壇にゼウス像をまつらされ、祭壇を汚されたので、ユダが立ち上がって、シリアを追い払って、汚された祭壇を引き倒し、新しい祭壇を築いたという史実であります。それは紀元前１６５年に起こった歴史的出来事です。ちなみに、この神殿はそれから235年後の、紀元後70年にローマ軍によって破壊され、それ以後、再建されることはありませんでした。

神殿を異邦人の手から奪還して、自分たちの神殿を守ったという事を、大いに喜び、それを記念して８日間のお祭りを祝い始めたユダヤ人たちでしたが、そこには、戦争に勝利した高揚感も相まって、自分たちの神様を、自分たちの力で守ったのだという自慢をする気分が満ち満ちていたのではないでしょうか。

こういう主なる神を差し置いての傲慢な態度は、旧約聖書でも厳に戒められていることですが、今の私たちもこのような態度に無縁ではないのです。全く主なる神の前にひれ伏して礼拝しているつもりが、いつしか礼拝している自分に酔ってしまって、知らず知らずのうちにそんな自分を誇りだしてしまうという事が起こらないとも限りませんので、私たちは油断することなく御言葉にへりくだって、聞いていかねばなりません。

さて、紀元後70年には崩壊してしまった、この神殿ですが、この神殿のことをイエス様はどのように思っておられたのでしょうか。それはヨハネ福音書２章13節からのいわゆる宮清めの節から、読み取ることが出来ます。イエス様は、「わたしの父の家を商売の家としてはならない」といって、熱意をもって、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らしたのでした。それくらい、イエス様も、父の家である神殿が汚されることが許せなかったのです。それくらいイエス様も父の家として建てられたこの神殿を大切に思われていたのでした。でも、イエス様は、やがてこの神殿が崩壊することを知っておられました。人々はこの神殿の中で自分を誇りだし、商売をし始め、全く罪なことを始めました。でもそれゆえにイエス様がこの神殿を滅ぼされることはありませんでした。お金をまき散らされた両替人は、立て直す準備のために２，３日は営業を休止したかも知れませんが、やがて、以前と同じようにその境内で両替の仕事を継続したことでしょう。イエス様は、神殿で彼らが罪を犯し続けることをめさせはしなかったのです。そうして紀元後70年のローマ軍による神殿破壊の出来事をただ待っておられたのです。

なぜイエス様は定められた神殿崩壊のその時をただ待っておられたのでしょうか。それはこの神殿の中で、ひたすら主なる神の前にひれ伏して、主なる神をこそほめたたえていた、まことの信仰者を救うためだったでありましょう。罪ある者のために神殿を崩壊させるという事は、まことの信仰者の信仰の場である神殿を失わせるという事にもなるからです。そういうわけで、今の教会に良い麦と毒麦とが混在させられているというイエス様のたとえ話にも似た状況が、この時の神殿にもあったのです。

では、紀元後70年以降のまことの神殿とは、どこかと言いますと、イエス様の言われる通り、イエス様が三日後に復活して立て直された、イエス様ご自身の体のことだったのです。それから忘れてはならないのが、イエス様を信じる私たちの体一つ一つも又、イエス様が宿られるまことの神殿なのであります。そのようでありますから、私たちは自分自身を誇ることがありません、私たちは神の住まう神殿として、主なる神から守られているのです。

さて、当時の神殿では、神殿奉献記念祭が祝われて、ユダヤ人たちは喜びにあふれていたことでしょう。その喜びの中で、必然的にと言いますか、イエス様は憎まれ、罠を仕掛けるユダヤ人たちに追い回されるのです。なぜ彼らがイエス様を殺そうとするほど憎んだかと言いますと、イエス様の喜びと、彼らの喜びとが、全く異質だったからです。全く異なる喜びを両者は抱いていたのでした。結論から申しますとイエス様の抱いている喜びとは父なる神と一つであること、父なる神と共に永遠に住まう喜びであります。一方、イエス様を迫害するユダヤ人たちが抱いている喜びとは、この神殿奉献記念祭というお祭りがいつまでも、毎年定められた8日間に行われ、自分たちが、その熱狂的に自分を誇るようなお祭りを継続できることでした。

「あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。」彼らのことをイエス様は、わたしの羊ではない、と言われました。まさにその通りです。異邦人を追い払い、神殿を守った自分自身を誇り、それを喜びとしている限り、彼らはイエス様の羊でありえません。又、彼ら自身もイエス様を信じていないので、それで結構と、思っていたことでありましょう。つまり彼らは、イエス様とは関係なく、自分たちの喜びに浸っていたかったのです。そして、それが神殿以外の場所でのことならば、ただ彼らがイエス様と無関係であれば済んだ話でしたが、このことが、まさに父の住まいである神殿で起ったという事に、今日の出来事の核心があります。イエス様は父の住まいである神殿の中で「わたしと父とは一つである」と宣言されました。これを聞いてこのユダヤ人たちはイエス様を殺そうと思いました。イエス様は「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」と言われましたが、このユダヤ人たちにとって、イエス様と父なる神とが一つであり、自分たちがイエス様に従っていくなどということは夢にも考えられられなかったことでしょう。それゆえこのユダヤ人たちは、イエス様の言われる「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」という御言葉を聞いてもせせら笑いこそすれ、それを信じるという事は全くできなかったのでした。

一方で、この神殿の中には、イエス様の声を聞き分けるまことの信仰者である羊も多くいたことを忘れてはなりません。この父なる神の住まいである神殿は、本来、イエス様の声を聞き分ける羊たちであるまことの信仰者の為にたてられたのです。

さて紀元後70年までといういわば期限付きの、この神殿でありましたが、イエス様は、この神殿を父の家として命がけの熱意をもって守り、清めようとされました。このイエス様の思いや態度は、今の世でのまことの神殿である私たち一人一人の体や、キリストの体であるこの教会に対しても、引き継がれています。私たちの体は、それぞれに定められた十字架の下での死の時までの期限付きでありますが、この地上でその体はイエス様から大切にされ守られているのです。そうして十字架を通して、新たな命の段階へと導かれ、新たな命に復活させられるのです。

この世での私たちに与えられている体、そして、建物としてのこの世の教会も、未来永劫存続するものではありません。しかし、イエス様は、信じる者たちを、その定められた終わりの時まで、大切にして養い守って下さいます。そうして信じる者には、永遠の命がイエス様によって与えられるのです。

「わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。」とイエス様は言われます。イエス様ご自身も、その偉大さを決して自分自身の内に見出そうとはせずに、全ては父なる神から与えられたものとして、その父なる神の偉大さをほめたたえるのであります。

ましてやこの世で限りある命を生きる私たちが、永遠の命の与え主である主イエスをほめたたえずにはおられないでしょう。

この様に説教していけば、誇る者は主を誇れ、自分を誇ってはならない、という事が当たり前の様に知られるのですが、それでも尚、私たちは、自分を誇るという罪な傾向から逃れることが出来ないでいます。

今日の民数記の箇所には、この世での自分の命の限りを知ったモーセの謙遜な祈りが記されています。「彼らを率いて出陣し、彼らを率いて凱旋し、進ませ、また連れ戻す者とし、主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください。」彼らを、飼う者のいない羊の群れのようにしないでください、と主に祈るモーセは自分に与えられた分をわきまえた人でした。彼は、定めにより自分自身は、約束の地カナンに入ることを許されないまま死にました。しかし、彼はこの世で有限である我が身をちゃんと弁えて、後継者としてヨシュアを選んで、彼を後継の職に任じたのでした。

私たちが、主の共同体の中で、主に飼われる羊となるという事は、このように自分に定められた務めを定められた時まで果たし、そうして、主の共同体の一つの命の内に組み込まれていくという事でしょう。モーセは自分の足でカナンの地に立つことは出来ず、その喜びを自分自身で味わえなかったのでしょうか。そうではありません。モーセはその役目をヨシュアに引き継いで、世を去りましたが、モーセもヨシュアも一つとなって、同じ父なる神の家に住まう喜びへと入れられたのであります。

お祈り致します

父なる神

あなたは、この教会に集い、あなたを信じる者たち一人一人を、あなたの体として養い育て守って下さいます。その日々の計り知れない御恵みに感謝いたします。

又、あなたは、御言葉によって、永遠に存続するまことの宮が、わたしたち一人一人のことであり、その私達の体をあなたが永遠に守って下さることを信じさせてくださいました。その憐れみと慰めに感謝いたします。

どうか私たちがこの世を去る時は十字架の下にあり、御子の血のあがないによって、御子の復活の御体と共に、私達も体のよみがえりに預かることが出来ますよう、日々の私たちの歩みを守り導いて下さい。

どうか私たちの内にある争う心、妬み、傲慢をあなたが打ち砕いて、私達が苦しみの内にあっても、あなたの喜びと平和のうちに住まうことが出来ますよう、恵みをお与えください。